

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

岩手県一関市

○学校名

一関市立松川小学校

○学校のURL

なし

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】各学年1学級 【特別支援学級】1学級、【合計】7学級

○児童生徒数

【全児童数】105人（平成24年11月1日現在）
（内訳：1年生16人、2年生16人、3年生21人、4年生16人、
5年生18人、6年生18人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】

「自ら学ぶ子ども」「思いやりのある子ども」「たくましく健康な子ども」

【人権教育に関する目標】

（基本目標）自他の生命を尊び、自分のことも相手のことも大切にしようとする
心情を育てる

（重点目標）「人権の意義、内容についての理解」

「人権意識の向上」

「あいさつを通じた人間関係の育成」

「コミュニケーション能力の育成」

「子どもたちが主体的に取り組む活動の推進」

○人権教育にかかる取組の全体概要

本校は単学級で、幼い頃から固定化された人間関係の中で、積極的にコミュニケーションを図りながら互いの考えを理解し認め合うことや、いじめや仲間はずれを自らの課題として考えることについての意識が希薄であるという傾向がみられる。

これを踏まえて、人権尊重の理念である「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」が重要な課題であると考え、人権教育について意図的に指導し

ていくことの必要性を感じている。人権尊重の理念を単に理解するだけではなく、理解したことを実生活の場での態度や行動に現れるようになることが求められる。

本校では、全ての教職員が取組や指導について共通理解を図るとともに、各教科等や、教科外活動等の特質を踏まえながら、教育課程に意図的・計画的に位置付け、効果的な指導法や教育活動を工夫・改善していくことにした。

3. 特色ある実践事例の内容

①人権教育全体計画

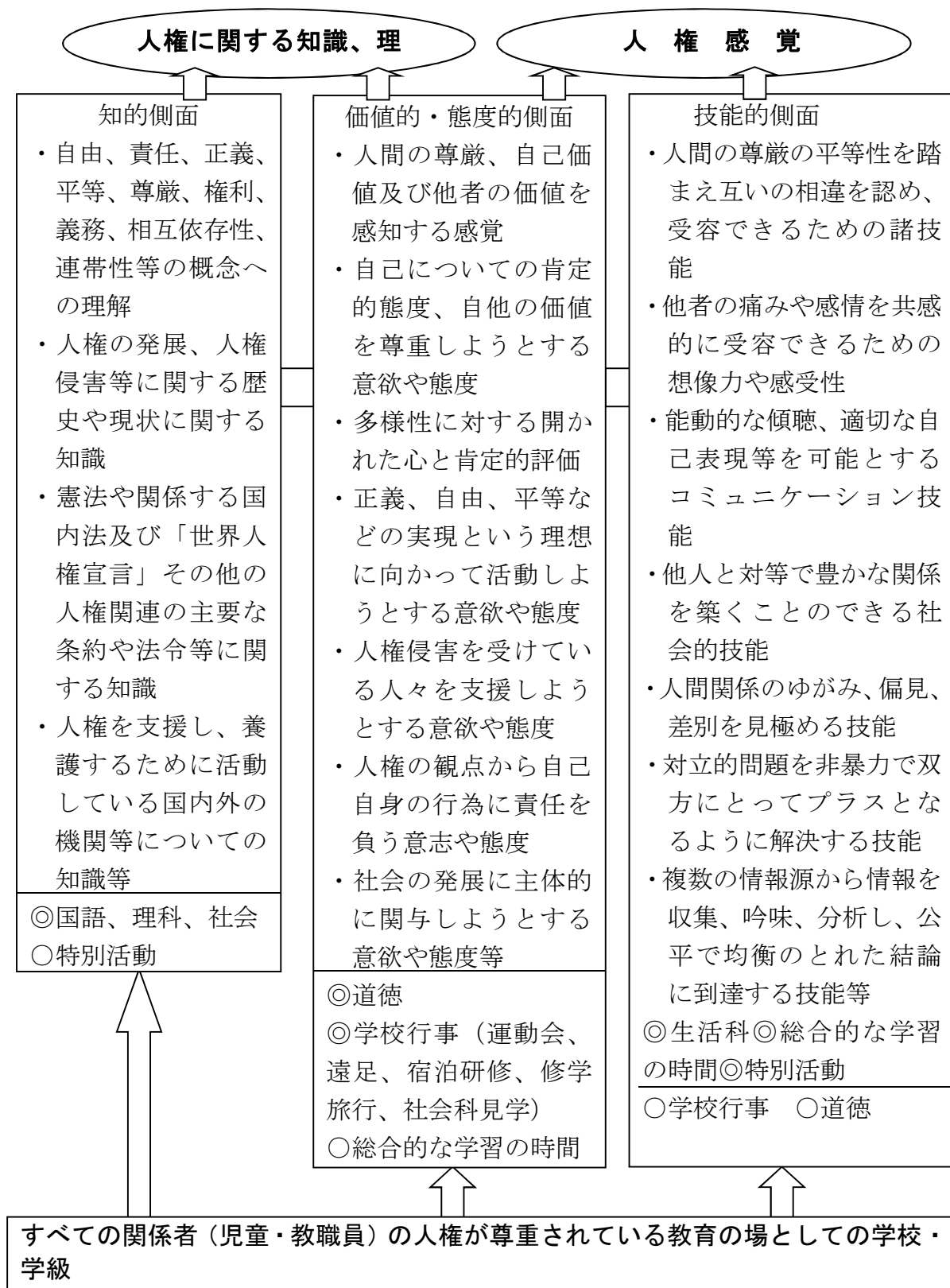


② 人権教育を通して育てたい資質・能力

『人権教育を通して育てたい資質・能力』

自分の人権を守り、他者の人権を守るための実践行動

自分の人権を守り、他者の人権を守ろうとする意識・意欲・態度



③ 調査研究の実施計画

時 期	内 容	備 考
4 月 5 日 (木)	第 1 回研究推進会議 (人権教育について協議・検討)	研究推進委員 5 人
4 月 1 2 日 (木)	校内研究会 (人権教育について協議・理論研究・検討)	教職員 1 2 人
4 月 1 7 日 (火)	年間目標として「あいさつ運動」の取組	
4 月 1 9 日 (木)	P T A 総会で人権教育について保護者に説明	生徒指導担当
4 月 2 7 日 (金)	掲示「思いやりコーナー (仮称)」の設置	担当
5 月 1 0 日 (木)	陸前高田市立竹駒小学校との交流	全校
5 月 1 4 日 (月)	学団研究会 取組の計画	低学年・高学年
5 月 1 8 日 (金)	運動会に向けた取組 「さいき」利用者への招待	5 年生
6 月～	各学年の実践	
6 月 1 3 日 (水)	「さいき」訪問 (低学年)	1・2 年生
〃	宿泊学習・修学旅行での協力 振り返り	5・6 年生
6 月 2 6 日 (火)	保育園との交流	関連学年
6 月 2 8 日 (木)	ふわふわアンケート (仮称) 調査	各学年、保護者
7 月 2 日 (月)	学級集団の傾向を把握するためのアンケートの実施と検討	4・5・6 年生
7 月 4 日 (水)	親子読み聞かせの実施 (講師招聘)	5・6 年生、保護者
7 月 5 日 (木)	第 2 回研究推進会議 (中間反省)	研究推進委員 5 人
7 月 3 0 日 (月)	先進校視察研修	東京都内小学校
8 月 2 4 日 (金)	情報モラル学習会	5・6 年生
〃	大人向け情報モラル学習会	保護者
9 月 5 日 (水)	「さいき」訪問	5・6 年生
9 月 2 0 日 (木)	道徳授業研究会	中学年
10 月 4 日 (木)	読み聞かせ・お話し会 (講師招聘)	低・中学年
10 月 2 3 日 (月)	道路清掃 (クリーン作戦週間)	各学年
11 月 2 8 日 (水)	「さいき」訪問 (中学年)	3・4 年生
11 月 7 日 (金)	人権講演会 (講師招聘)	5・6 年生、保護者
11 月 1 9 日～	赤い羽根、共同募金の取組	児童会
12 月 6 日 (木)	学級集団の傾向を把握するためのアンケートの実施と検討	3・4・5 年生
12 月 1 0 日 (月)	第 3 回研究推進会議 (研究成果と課題につ	研究推進委員 5

	いての協議、次年度年間指導計画の検討)	人
1 月	研究のまとめ、県の研究推進パンフレットの原稿検討・提出	
2 月	研究報告の印刷・配付、次年度年間指導計画の確定	30 部関係機関

④ 授業研究会を通した人権教育についての実践例

第 5 学年道徳学習指導案

日 時 平成 24 年 11 月 8 日 (木) 5 校時

対 象 5 年生 (男 14 名 女 4 名 計 18 名)

指導者

1 主題名 思いやり・親切 2－(2)

2 資料名 「風切るつばさ」

3 主題設定の理由

(1) 児童について

本校では、人権教育に取り組み、相手の気持ちを考える、相手の立場に立って行動するといった相手意識を育てることを目指している。

本学級の児童は、とても素直で学習にも行事にも意欲的に取り組んでいる。普段の様子を見ても、トラブルが少なく、休みの日にも誘い合ってイベントを企画し一緒に過ごすなど、仲の良い様子も見られる。また、高学年となり執行部や委員会活動にもより積極的に参加するようになり高学年としての頼もしさも感じられるようになってきた。

しかし、トラブルが少ないからこそお互いの気持ちを擦り合わせる機会が少なく、相手の気持ちを考え、相手の立場に立って行動をするという経験が不足しているようにも感じられる。誹謗中傷しようとしてではなく、何の気なしに言った言葉が相手を傷つけていることがあり、言葉を発した本人も自覚できず、言われた側も不満をもち引きずっていることが多々あった。また、自分の言動に責任をもつという点でも未熟な側面が見られる。「うざい」「きもい」といった流行言葉をみんなが言っているという安易な理由で使うことで相手を傷つけていることもある。

(2) 資料について

アネハヅルのクルルとカララは群れの中で一緒に暮らしている。クルルは、身体の弱いカララのことを気にかけて面倒をみていた。ある日、群れがキツネに襲われ、幼い仲間の命が失われる。仲間はそのを、カララのために音を立てたクルルのせいにする。クルルの心は傷つき、孤立してしまい、ついには飛ぶことさえできなくなってしまった。やがて、冬が近づき、群れは次々に南へ飛び立っていく。そのような中であって、ひとりうずくまるクルル。そのとき、カララが舞い降りてきた。カララは何も言わず、ただじっととなりにいて、南にわたっていく群れと一緒にみつめているのであった。

クルルが孤独な立場となるとき、カララはどのように考え、どんな気持ちになったのか、そしてカララはクルルに何を伝えようとしたのか。カララを自分と重ね合わせて考えることで、自己を見つめ直すことができる資料である。

(3) 指導について

相手意識をもつというとき、「相手」を考えることは多いが、「自分」を考えることは少ない。「悲しいだろう。」「傷ついているだろう。」というように相手の気持ちになり相手の立場を考える機会が多いが、どのような考えや気持ちで自分は言ったり行ったりしたのか、自分の言動の理由を考えることは少ない。相手に対する自分の考えや気持ちをクローズアップさせて話し合い、自己を見つめ直す機会としていきたい。

そのために、自分と重ね合わせることができるようカララの考えや気持ちを話し合っていきたい。まず、いつもエサを分けてくれているクルルが孤独な立場になったとき、カララは勿論味方になりたかったはずである。しかし自分も孤独になるのが怖い、孤独になればエサを十分にとれない自分には死が待っているかもしれない、そこには葛藤があったことを十分に捉えさせていきたい。

次に、それでもカララは葛藤を乗り越えクルルの傍に行きじっとツルの群れを見つめていた。このときカララはクルルに何を伝えたかったのか考えさせ、それは友情、感謝の気持ちであったことを捉えさせていきたい。

最後に、自分と重ね合わせる手段として、もしクルルのようにひとりぼっちになった相手がいたとき、またはひとりぼっちになりそうな相手がいたとき、自分だったら葛藤の中であってどのように考えたか、そしてどのように行動してきたのか、これまでの自分と照らし合わせながら考えさせていきたい。

これらの指導を通して、自分のこれまでの相手に対する言動や、そのときの考えや気持ちを見つめ直し、さらにより良い人間関係を築いていこうとする気持ちを育てていきたい。

4 本時の展開

(1) ねらい

相手に対する自分の考えや気持ちを見つめ直し、さらにより良い人間関係を築いていこうとする態度を育てる。

(2) 展開

		学習活動と主な発問	期待する児童の反応	指導上の留意点
導入	展 開	1 本時で考えることを知る。	・仲間殺しの犯人扱いされた。 ・だれ一人味方はいなくなった。	・難しい文章であるので家庭学習の音読で事前読みをさせておく。 ・クルルとカララを混同しないよう立場を明確にし板書する。 ・クルルが仲間殺しの犯人扱いをされ孤独な立場になったことを押さえる。 ・エサを分けてもらっていたカララでさえもみんなの中に交じっていたことを押さえる。
		2 登場人物の行動やその時の心情について確かめ話合う。 ・カララは体が弱く、エサを分けてもらっていた。 ・そんなカララにクルルはえさを分けていた。 ・アネハヅルの群れがキツネに襲われた。 ・クルルはどうになりましたか。		
		3 価値について考える。		
		カララでさえ、だまってみんなの中に交じっている。このとき、カララはどんなことを考えていたでしょう。		
		・勇気をだして味方になりたい。 ・自分もひとりぼっちになるのが怖い。 ・知らないふりをしよう。		
展 開	展 開	カララは、クルルにどんなことを伝えたかったのでしょうか。	・話し合いを通してカララは葛藤の中にあつたことをつかませる。 ・冬を前に飛べない鳥は死ぬしかなくなることを押さえさせる。 ・カララは、言葉では何も伝えていないことを押さえさせる。	
		・本当は、味方になりたいかったんだ。ごめんね。 ・いつもエサを分けてくれてありがとう。僕の大切な友達だよ。 ・クルルが飛べるようになるまで一緒にいるよ。		
		4 価値に照らし合わせ自己を見つめる。		
		ひとりぼっちになった友達がいたとき、またはひとりぼっちになりそうな友達を見たとき、これまでどんな自分だったでしょう。		
		・自分も一人になるのが嫌で、同じように無視したり悪口を言ったりしてしまいました。 ・味方になりたいと思ったけど勇気をだせませんでした。		
終末	5 まとめる ・教師の範読を聞き、資料の続きの話を知る。			

5 板書計画

挿 絵 ・ 味方になりたかったんだ。ごめんね。 ・ ありがとう。僕の大切な友達だよ。 ・ 一緒にいるよ。	南に渡っていく群れをいっしょに見つめていた。 クルル ・ 死んでしまう。行かなくてはならない。 ・ 何も言わず。 カララは、クルルにどんなことをつたえたかったのだろう。	挿 絵 ・ ひとりぼっちになった。 ・ 仲間殺しの犯人扱い。 エサを分けていた	挿 絵 カララはどんなことを考えていたのだろう。 勇気を出して味方になりたい、助けてい。 自分もひとりぼっちになりたくない。 だまって知らないふりをしよう。	風邪切るつばさ カララ 体が弱い ありがとう 感謝 ・ だまってみんなの中に交じっていた。
--	---	---	---	--

授業の考察

○授業者から

- ・ 児童は相手の気持ちを考えることは多いが、自分に立ち返って考えることは少ないので、この資料を選定し、授業に臨んだ。その中であえてカララの気持ちに着目させることで自分と向き合わせることができ、児童から負の気持ちを引き出すことができた。
- ・ 仲間はずれ、いじめについて資料を通して考えさせたかった。
- ・ 過去の自分と向き合わせたかったが、児童にとっては重く、書きにくかったようである。

○研究会から

- ・ 人権教育の視点から資料を選定し、資料分析することにより、児童の実態にあった道徳の授業を展開することができた。
- ・ 児童は、登場人物の行為に共感しながら、自分を振り返ることができた。また、今後「仲間はずれ」「いじめ」の行為が見られたときには、周りに振り回されず自分の考えで行動することの意味を考える機会になった。
- ・ 一人一人が今までの自分を省みることにより、これから相手を思いやる気持ちをもつきっかけになると思われる。

○その他

- ・ 本県の取組課題となっている復興教育に係わる思いやそれを行動化することを意識する機会になった。
- ・ 人づくりの面からも人権教育は大切であることを、再確認できた。

⑤ 施設との連携

特別養護老人ホーム「さいき」訪問

ねらい

- ・老人ホーム訪問を通してお年寄りと親しみを持ちながら交流する。
- ・身近な人に感謝の気持ちを言葉や行動に表すことができるようにする。

取組内容

- ・あいさつ
- ・歌の発表
- ・プレゼント
- ・交流（握手や会話）
- ・あいさつ



ありがとうございます。
お元気で長生き
してください。
楽しかったで
す。

ありがとうご
ざいました。
さようなら。

ありがとうね。
また来てね。

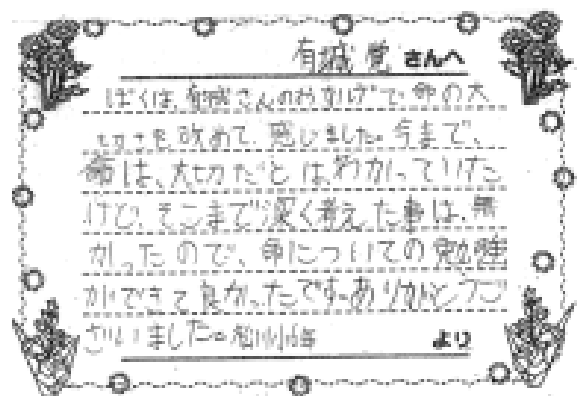


考察等

限られた時間ではあるが交流する事により、長年社会に貢献したお年寄りにいたわりの気持ちや感謝の気持ちを伝えることができた。

歌や踊りの発表では、涙を流して聞いてくれるお年寄りもいて温かい気持ちになった。お年寄りに分かる歌を考えて表現すれば一緒に歌うことができてさらによかったと思う。

講話を通し「命の大切さ」を感じる。
3年生～6年生

[illegible]

岩手日日新聞より

⑦ 校内掲示の工夫

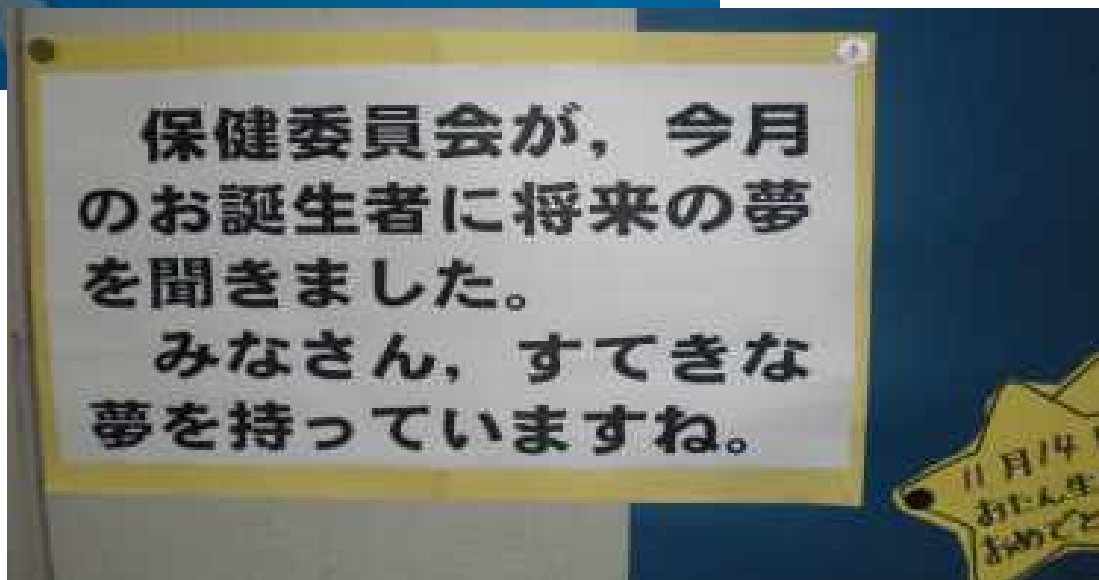
1 保健室前
ねらい

生命誕生から命の大切さを考え、「将来の夢」の掲示から一人一人がかけがえのない存在であることに気付く。



わたしは、将来トリマーになりたいです。

ぼくは、プロ野球選手になりたいです。



生まれる前から大切にされていたんだよ。

2 理科室前

ねらい

よりよい人間関係を築くために、相手から言われてうれしくなる言葉を紹介し、お互いを認め合える機会にする。



4. 実践事例の実績、実施による効果

事例	実績・効果等
授業研究会	・人権教育の視点を指導者がもつことにより、教育活動全体を通して、「人権」「相手への思いやり」を再確認し共通理解することができた。 ・相手意識をもつ、相手の立場に立つ考え方を意識づける機会になった。 ・校内研究会の重点である単位時間の中に「ペア学習」を取り入れることにより、相手の言葉を真剣に聞いたり、自分の考えを相手に分かるように伝えたりして、お互い考えを深めることができるようになってきた。 ・研究協議で共通理解を図ることにより、指導者側が「人権とは」と問いながら指導に当たることができ、児童にも意識させることができるきっかけになった。 ・特別支援教育での「人権」について、考える機会になった。
施設訪問	・例年行われている老人施設訪問では、各学年の発達段階を踏まえ児童もお年寄りも楽しめるメニューを考え発表したり、交流したりしている。交流会後、お年寄りと握手しあいさつすると「また来てね。」「楽しかったよ。」等、声をかけられて「来てよかった。」という感想があふれ、優しい気持ちになった。 ・継続した取組をしていきたい。
講演会	・「命の大切さ」「お互いを認め合う」「言葉遣い」について考える機会になり、深く感銘を受けた児童もいた。 ・復興教育に関する講話では、支援を受ける・支援を与えるという立場を越えて、共に世の中をつくるという気持ちにたどり着けるまでの取組の様子を聞くことができ、お互いつながっている感覚をもつことができた。 ・祖父母や地域への案内を出すことにより、学校での取組を共有できた。
日常的取組	・生命の誕生と今月の誕生者、将来の夢の揭示、「ふわふわことば」の募集と揭示により、優しい気持ちになることができた。 ・心の架け橋としたあいさつ運動を児童会が中心になって行い、あいさつはコミュニケーションの基本ということを再確認することができた。 ・学年を越えて所属感、連帯感をもてるようたてわり班を構成し、お弁当会・たてわり遊び等を行い、異学年交流の幅を広げることができた。

5. 実践事例についての評価

- ・教育活動全体を通して「人権」を意識するようになった。
- ・人権に関する年間指導計画を作成し取り組む中で、特に外部講師を招聘することにより、「基本的人権」「人間として生きること」について考える機会になった。
- ・取組を通して人権教育の視点で学校行事の見直しやねらいを明らかにする機会になった。
- ・教師が児童同士の関わりを意識したたてわり班活動を計画することにより、学年の壁を越えて遊んだり、誘い合ったりする姿が見られ、児童の人権意識を高めることができ、「うざい」「きもい」等、の言葉を聞くことがなくなった。
- ・保護者に対して人権の視点で学校生活の情報を発信することができた。
- ・他地域での人権教育（同和問題等）について学ぶことができた。
- ・復興教育の柱に人権教育を位置づけなければならない。
- ・今後も「人権」について折に触れ考えて、取組を広げていきたい。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

一関市立松川小学校

児童間の固定化した人間関係を課題として捉え、「あいさつ」や「コミュニケーション」を大切にした取組や、社会福祉協議会や高齢者介護施設と年間を通した交流や連携の取組などを積極的に推進している。「相手の立場に立って行動するという経験が不足」し、相手を傷つける言葉が安易に用いられているとする課題意識は、多くの教員に共有されるものであろう。道徳の授業実践例では、相手の傷ついた立場を考えるだけでなく、「自分の言動の理由を考えること」も焦点化され、何気なく用いた言葉が相手を傷つける点を話し合わせる場面を設定するなど、自己を見つめ直すことを促す意識的に工夫された授業展開、丁寧な指導の様子が紹介されている。地域社会との交流活動においても、涙を流して聴いてくれる高齢者との出会いが記されているなど、人との実際的な関わりの中で育まれる人権意識の意義を明解に示す実践になっている。いずれも、県の取組課題「復興教育」の趣旨との密接な関わりにも言及されている。